

『土左日記』の「手取り交はして」

—— 神仙譚の受容について ——

北 山 円 正

一

承平四（九三四）年十二月二十一日、任期を終えた土佐守紀貫之は都に向けて旅立つ。この国の人々は連日饗宴を催して別れを惜しんだ。新たな国守として赴任してきた島田公鑒もその一人であった。貫之一行を、二十五・二十六の両日にわたって国守の館へ招き、持てなしている。そして、二人は歌を詠み交わし、

前の守今（さき）のもの、もろともに降りて、今の主（あるじ）も前のもの、手取り交はして、酔ひ言（よ）に心よげなる言（こと）して、出で入りにけり。

と、手を取り合い言葉を交わして別れている。この「手取り交はして」あたりについて、諸注は、

おりてとは、坐席よりおりたちて也、ゑひこととは酔言也、首途の祝言などいひかはし別るゝさま也（北村季吟『土左日記抄』）

さて、かたみに手とりくみて、ものせるは、古へ人の直情に

して、かへりて、敦厚なるさま見ゆめり。今も、へだてぬ中のわかれには、をりくする事にて、はなれがたき悲みの心を、せめてもやるしわざ也（香川景樹『土左日記創見』上）
今の守の、したしみ、別をしみてせらるゝわざなれば、今の守を先にいへり、よくく味ふべし（田中大秀『土佐日記解』上）

と、別れの場面における心情について解釈観賞を試みている。一見何気ないこの描写に対して、契沖は寛永二十（一六四三）年刊の『土佐日記』に次の書き入れを行っている。

遊仙窟云、下官不_レ忍_二相看_一、忽把_二十娘手子_一而別。

蘇武詩、行_レ役在_二戰場_一、相見未_レ有_二期_一。握_レ手一長歎、淚為_二生別_一滋。

李陵別_二蘇武_一詩云、携_レ手上_二河梁_一、遊子暮何之。徘徊蹊路側、恨々不_レ得_レ辭。晨風鳴_二北林_一、懼々東南飛。浮雲日千里、安知_二我心悲_一。（『契沖全集』卷十六）

はじめに、『遊仙窟』の主人公張文成と十娘との別れ、次は蘇武の「詩四首（其三）」（『文選』巻二十九、玉台新詠巻一）で、戦場へ向かう前夜妻と過すひと時の模様、最後はまず李陵の

「与蘇武三首（其三）」（『文選』巻二十九）で、旅立つ友を見送る思いを詠じている。そして「晨風鳴北林」以下は李陵の「贈蘇武別詩」（『芸文類聚』巻二十九・別上）からの引用であり、「浮雲日千里、安知我心悲」は前二句からは八句隔たっている。契沖は、三例の「把十娘手子」「握手」「携手」を、『土左日記』にある「手取り交はして」の典故と見ているのである。それぞれが別離の様子を描いており、一夜をとにした女性、妻、友人と手を取り合っているのである。『土左日記』でも新旧の国守が互いに手を取っており、状況が類似している。その点でこの書き入れは意味を持つと言えよう。ここからは、典拠の指摘のみにとどまらず、この日記の特質究明に繋がる一面を見出せるように思う。まずこの「手取り交はして」という表現から始めて、日記全体に検討を及ぼしたい。

二

別れの時の「手取り交はして」と同様の表現は、契沖が挙げた三例に留まらない。まずそれらの表現を確認しておく。右の「与蘇武三首」の第一首には「屏營衢路側、執手野踟躕」と「執手」がある。別れを前に手を取り合っていたためらっている。その李善注には、「毛詩曰、執子之手」と、『毛詩』（邶風・擊鼓）の

一句を引いている。その鄭箋には「執其手、与之約誓示信也」とあり、「擊鼓」の場合は誓約の気持を表す行為だったのである。⁽²⁾別れの時に手を執ったのではない。

『毛詩』（邶風・北風）には、「惠而好我、携手同行」とある。鄭箋には「性仁愛而又好我者、与我相扶持。同道而去」と注しており、自分に親しむ者と手を取り合って行くことと言った。

また、『楚辞』（九歌・河伯）に「子交手兮東行、送美人兮南浦」とあり、朱熹の『楚辞集注』には「交、手者、古人將別、則相執手、以見不忍相遠之意」と見える。屈原と河伯が手を取り交わして別れるところであり、『土左日記』と同じ場面である。親愛の情を現している。

『文選』には、

歎携手以偕老、庶報德之有鄰（巻十六、潘岳「懷旧賦」）
相与結侶、携手俱遊（巻五十一、王褒「四子講德論」）
携手之期、邈無日矣（巻四十三、趙至「与嵇茂齊書」）
などがあり、手を携えてともに老いるのを喜び、友と手を取り合って旅に出る、ともに手を取り合って遊ぶのはいつのことか、などと親しい間柄にあることを示す動作である。よって、

何以叙離思、携手游郊畿（巻二十、潘岳「金谷集作詩」）
撫膺解携手、永歎結遺音（巻二十六、陸機「赴洛一首」）

（一）
と、親しい人と別れる時には、互いに手を取って名残を惜しむのである。後者の例は、取り合った手を離して別れの言葉を述べて

おり、日記の表現に似る。

次に『玉台新詠』を取り上げる。

願得「長巧笑」、携「手同」車帰（巻一、「古詩八首」ノ二、「文選」巻二十九）

居願「接」膝坐、行願「携」手趨（巻三、楊方「合歡詩五首」

ノ二）

豔裔陽之春、携「手清洛浜」（巻六、吳均「擬古四首」ノ「携」手）

は、男女の仲睦まじい様子を現している。閨情の詩を中心とするこの詩集の特徴からして、この類の表現があるのは当然であろう。

『遊仙窟』には、

但當「把」手子、寸斬「セラルモ」亦甘心。

余時把「著」手子、忍「心」不「得」。

余提「手」挽、兩人争「力」。

手子「從」君把、腰支亦「任」迴。

などである。張文成が十娘を抱擁する一連の場面に見える。張郎が十娘の手を取って抱き寄せようと、十娘は手を取られて抱かれたと唱う。手を取るの、ここでは愛欲の表現である。『遊仙窟』の中では、契沖が書き入れに引いた「把」十娘手子」だけが別れを惜しむ所作であり、その状況を異にする。

さらに『白氏文集』の場合がどうであるかを見ておこう。

開「眉笑相見、把」手期「何」処（巻七・0320、「秋日懷「杓直」」

夢中握「君」手、問「君意何如」（巻九・0421、「初与「元九」別後、

忽夢見之。及「寤」而書「適至」、兼寄「桐花詩」。悵然感懷。因「此寄」。

丹霄携「手」三君子、白髮垂「頭」病翁（巻十七・1079、「廬山草

堂、夜雨独宿、寄「牛二李七叟三十二員外」）

人間更何事、携「手」送「衰年」（巻五十八・2910、「醉後重贈「晦

叔」）

などとあり、ともに出掛け、夢の中で手を取り、宮中で一緒に働き、ともに年をとるとある。いずれも友人同士の親しい間柄を示している。これまでに挙げた中国文学における、手を取る、手を取り合う行為は、まとめて言えば、親愛の情を現すものである。例外はまず認められないと言えよう。

平安朝に目を転じてみると、意外に手を取り合う表現が少ない。男女の睦まじい様子や、友情を描くことが文学に少ないためである。

老弱連「袂」、頌「德」溢「路」、男女携「手」、詠「功」盈「耳」（『性霊集』

巻五、「請「福州觀察使」入京啓」。『性霊集便蒙』、「李陵詩曰、

携「手」上「河梁」）

春天多「感」招「遊客」、携「手」携「觸」送「一時」（『新撰万葉集』巻

上・春歌）

逢「別」易「朋友」契、袖交「手」交「語」何「忘」（同巻下・恋歌）

染「紅」袖於「百和」、猶「耽」芬「馥」、携「素」手於「一拳、已迷「心」情」（『本

朝文粹』巻一、大江朝綱「男女婚姻賦」）

空海の文章は、男女がこぞって、誰もがそろつての意であり、親

行くと見てよいだろう。

四

「前の守」と「今の主」との別れの場面で、二人は歌を贈答している。

都いでて君にあはむと来しものを来しかひもなく別れぬるか
な

と、「今の主」島田公鑒が詠じている。都を発つてはるばる波濤を越えてあなたに会おうとやって来たというのに、その甲斐もなくあつけなく別れ別れになつてしまつのですねと残念な思いを訴えかけている。長い旅の苦勞の末にようやく出会つたところで、もう別れねばならない。この落差は大きいと感じられよう。公鑒の言つ嘆きは、右に引いた『続浦嶋子伝記』の、「各成_二訣別之詞_一云、嗟会難離易、古人所_レ歎也」と重なる。束の間の逢会とその直後の別離は古来の嘆きであつた。「会難離易」は、『遊仙窟』にも見える。『続浦嶋子伝記』は『遊仙窟』の語を取り入れたのである。張文成と十娘が一夜をとみにして、その後別れが近づき、張郎が語りかける。

下官拭_レ淚言曰、所_レ恨別易会難、居留乖隔……

張郎にしてみれば、深山幽谷を分け入つてようやく神仙窟にたどり着き、十娘とめぐり出會つて結ばれたものの、もう別れの時を迎えねばならないのである。會つのは難しいのに別れるのはたやすい、公鑒が歌に託した思いはこんなところにあるのだろう。

「所_レ恨別易会難、居留乖隔」の受容は、すでに、

妾也松浦佐用姫、嗟_二此別易_一、歎_二彼会難_一（『万葉集』卷五・

871、「詠_二領巾麾領_一歌」）

中臣朝臣宅守、娶_二藏部女孺狹野弟上娘子_一之時、勅断_二流罪_一、配_二越前国_一也。於_レ是夫婦相_レ嘆易_レ別難_レ會、各陳_二慟情_一贈答歌六十三首（同卷十五題詞）

今夕詔_二詩臣_一曰、伉儷相親、天人惟一。易_二離難_一會、今古所_レ傷（『本朝文粹』卷八、小野美材「七夕代_二牛女_一惜_二曉更_一、応_レ製_二序_一」）

などに見える。いずれも男女の会いがたく別れやすいことへの嘆きを述べている。これに十娘が応える。

児与_二少府_一、平生未_レ展、邂逅新交、未_レ尽_二歡娛_一、忽嗟_二別離_一。人生聚散、知復如何。

あなたとはたまさか出會つて歡びをとにしたが、もう別れねばならない。会えば別れるの道理は如何ともしがたい。張郎と同じく、もう別れ行くことへの悲嘆を口にする。この気持ちも公鑒の心情と重なっている。先行するこれらの表現が實之の脳裏にあり、それをもとにこの件りを作り上げたのである。

今取り上げている「前の守」と「今の主」との別れの場面は、錢での一齣である。他の例を見出していないが、おそらく新しい国守が前国守のために別れの宴を催すことが時にはあつたのだろう。史実の有無はともかくとして、しばらくある地に暮らした人をその地の人々が見送る際に饗応する例は、『続齊諧記』に次の

ように見える。

天氣和適、常如三三月、百鳥哀鳴。悲思求、歸甚切。女曰、罪根未滅、使君等如此。更喚諸仙女、共作「歌吹」送劉阮（『蒙求』・『劉阮天台』所引の本文による）

仙境に迷い込んだ劉晨と阮肇は、ともに美しい仙女と結婚し、その地で安楽な暮らしを続ける。ところが郷里を思う気持ち止みがたく、帰郷を仙女に訴えかける。切なる望みを受け入れた二人の妻は送別の集いを設ける。他の仙女たちを呼び寄せ、音楽とともに劉阮の二人を送り出したのである。日記においても、新国守の館における饒別の模様を、

日一日、夜一夜、とかく遊ぶやうにて明けにけり。

なほ守の館にて、あるじしののしりて、郎等までに物かづけたり。

などと描いている。四年の任期を終えて都へ向かう人々への、二日間にあたる饒別の会である。この「遊ぶ」は奏楽唱歌の遊びであり、『劉阮天台』の「共作「歌吹」と同じである。仙界を去る人を送る時には音楽を奏することになっていたのであろうか。『遊仙窟』の場合は、張郎と十娘らとが別れる時に、宴は開いていないが、十娘はもとより五嫂や十娘の侍女と詩の贈答をくり返している。

十娘曰、……因詠曰、……僕乃詠曰、……

十娘乃作「別詩」曰、……五嫂詠曰、……下官詠曰、……

下官辭謝訖、因遣左右取益州新樣錦一疋、直奉五嫂、因

贈詩曰、……五嫂遂抽金釵送張郎、因報詩曰、……

更取滑州小綾子一疋、留与桂心香兒數人、共分、……香兒

因詠曰、……

十娘報詩曰、……又詠曰、……下官詠曰、……十娘詠詩曰、……

日記では實之と公鑒とが歌のやりとりをしているし、

からうた、声挙げて言ひけり。やまとうた、主もまらうとも、ことも言ひ合へりけり。

と、さまざまの人たちとの歌の応酬があった。これは、張郎と五嫂・侍女らとが詩のやり取りをしているのと同じである。

右の「郎等までに物かづけたり」は、公鑒が實之はもとよりその侍者たちにまでを贈物をしたということである。『遊仙窟』では、

十娘報以「双履」報詩曰、……下官又遣曲琴取揚州青銅鏡、留之与十娘、并之贈詩曰、十娘又贈「手中扇」詠曰、……

と、十娘は張郎に「双履」と「手中扇」とを贈っている。また、『続

浦嶋子伝記』では、神女が嶋子との別れ際に、

亦以「繡衣」被嶋子、而送玉匣。裏以五綵之錦繡、緘以萬端之金玉。

と、「繡衣」錦の衣を与え、錦で包み金玉で封をした「玉匣」を贈っている。「被」の訓は「かづく」であり、⁽⁸⁾「郎等までに物かづけた」に通じるところもあるだろう。日記は、こういった神仙譚における決まった形式を、巧みに取り入れていると言ってよいだろ

う。

これまでに引用し、そこからの受容を指摘してきた『遊仙窟』『続浦嶋子伝記』『劉阮天台』は、ともに神仙譚である。またこの中から数例を挙げただけではあるものの、これまでの結果から言えば、『土左日記』が随所で神仙譚を消化吸収しているという見通しを持ってよいように思う。他の箇所についても、右の先行文献以外にも視野に入れながら、神仙境を舞台とした伝奇・説話等々の受容について検討して行きたい。

〔注〕

(1) 賀茂別雷神社三手文庫蔵 書き入れは契沖のものだけではなく、下河辺長流のそれも含んでいる(岩波書店版『契沖全集』第十六巻・解説)。なお、書き入れの付訓はすべて省略した。

(2) 「撃鼓」は「与子偕老」と続いており、ともに年を取ることを手を取って誓っている。

(3) 『性霊集便蒙』の挙げる李陵の詩は、契沖が書き入れに引いていた「与蘇武三首(其三)」(『文選』巻二十九)である。これは親愛なる友との別れの場における例であり、人々が「福州觀察使」の「徳」と「功」を讃える文脈には合わない。たんなる語例として挙げただけのようである。

(4) 『続浦嶋子伝記』については、小島憲之「遊仙窟の投げた影」(『上代日本文学と中国文学』中)所収、渡辺秀夫「平

安朝文学と漢文世界』所収の関連論文、参照。

(5) 八木沢元『遊仙窟全講』は、この句の原拠として、魏の曹植「当来日大難」の「別易会難、各尽杯觴」を挙げている。

(6) 注(4)小島氏論考、新聞一美「伊勢物語における遊仙窟受容について——第五十三段・第五十四段を中心に——」(山本登朗編『伊勢物語 虚構の成立』所収)参照。

(7) これに対して張郎は、「相思枕」と「揚州青銅鏡」とを贈っている。『土左日記』では、主である公鑒が實之の従者に祝儀を与えているのに対して、『遊仙窟』では、旅立つ張郎が、五嫂に「益州新様錦一疋」を、侍女の桂心らに「滑州小綾子一疋」を贈っている。

(8) 観智院本『類聚名義抄』(法中)には、「被」の訓に「力ツク」がある。